

「GSI 筑波移転」第3回

両生類 — つくばの小ばなし

坂巻幸雄¹⁾

坂巻幸雄（さかまき ゆきお）

1956年通産省工業技術院地質調査所入所。地質標本館地質標準課長などを経て、1993年退職。ウラン鉱床の探査技術開発、休廃止鉱山や廃棄物処分場の汚染評価手法の開発などに携わる。1970-1971年全商工労働組合関信支部委員長。（写真は1979年当時）

移転当時、筑波は「国際的な」研究学園都市だ、としばしば言われました。なぜ「国際的」なのか。理由を3つ挙げなさい — 地元に新設された中学校で、こんな社会科の問題が出たという。そして、その正解は、

- 1) 車がないと生活できない。
 - 2) 水道の水がそのままでは飲めない
 - 3) 日本語が通じない飲み屋がある。
- ことなのだそうであった。

実際に住んでみるとこれらがただの笑い話ではないことがすぐにわかる。学園都市全体はちょうど東京の山手線エリアに当たる面積があり、地質調査所はいわば浜松町・田町に当たる位置に、つくばセンターが御茶ノ水・水道橋に、筑波大学が上野・日暮里に、国土地理院や土木研究所などが大塚・巣鴨相当の場所に対応している（第1図）。それら相互の行き交いも、日用品や食材の買い出しも、当時唯一の公共交通であるバスの便数が少ないため、とにかく車がなくては始まらない。アジア系の飲み屋が集まっていて、日本語が通じにくい一角に繰り出す時などには、下戸の私にも頻りに声が掛かり、「お前が一緒だと帰りの足の心配なしに飲める」と感謝された。

水道水の問題はより深刻であった。つくば市の上水道源・霞ヶ浦に流れこむ中小河川の流域は、養豚が盛んで、たつぷりと富栄養化した汚水が霞ヶ浦に流入、アオコが大発生するからである。当局は浄化に躍起となったが、夏場などには異臭が取り切れずにいた。

早々と川崎の旧居を引き払い、筑波山麓に引っ越した同僚・N君の家には、花崗岩の割れ目から湧き清冽な井戸があった。親切心の強い彼は、毎朝通勤車にこの水を積ん

で所長室に献上することを思いつき、実践した。その反対給付として、時々所長室で催される飲み会に、愛飲家の彼の姿があったとしても不思議ではない。このことを通じて、多くの所員は、養老の滝の伝説が、現実にもあり得ることを改めて覚ったのだった。

筑波移転問題は、延べ約20年に亘って、工業技術院の研究環境を揺さぶったが、一人一人の職員にしてみれば、生活をどう維持して行くのかがその中で最大の課題であった。常磐道・圏央道・つくばエクスプレスが四通八達する現在とは違って、片道100km、4回乗り換え、朝の常磐線は上り列車優先で下りは本数が少ないために所要時間3時間余り、というのは、遠距離通勤にしても苛酷すぎた。人様々の対応を図る中で、私は家族を東京・町田市に残し、単身赴任の道を選んだ。大きな要素としては、定年後は速やかに公務員住宅を引き払わなければならない、生活設計が立てられないことがあった。

公務員住宅に入るには住民票も移すことが原則だが、単身赴任の場合は世帯分離の手続きが要り、甚だ厄介なので、便法として住民票なしでの入居が認められ、その代わりに、家族構成に拘わらず職位から見て最大級の広さの住宅を選択するように指示された。研究所の将来のために、最大限の住居枠を確保したい当局の戦略である。その結果、がらがらの大きな家に一家族用相当分の高い家賃で住み、冬場は暖房のガス代にさらに数万円を払うと言った負担を余儀なくされた。

そのような曲折を経て、筑波山の「四六の蝦蟇」ならぬ二足の「両生類」生活が始まったが、地質調査所で最も早い適応を見せたのは、測量・試錐等の現場仕事に熟達

1) 地質調査所（現産総研地質調査総合センター）元所員

キーワード：筑波移転、公務員住宅



第1図 東京の山手線エリアと筑波学園都市を同縮尺で比較した図。地理院地図を使用。

した人たちであった。移転早々、有志で自炊サークルを作り、共同で食事作りを始めたのだ。健康上も精神衛生上も、この方式が優れていたことは言うまでもない。それに引き替え、他の研究所では、週に一度奥方が1週間分の食事を持って現れ、流しに山積みになった食器を洗って帰るのが「常識」になっていたとも言う。「実験用のビーカーはちゃんと洗える人が、なぜ食器だと洗えないの？」と訊いてはみたが、答ははっきりしなかった。

そうこうするうち、庶務掛を通じてつくば市役所から「市民税を払って下さい。」と言ってきた。「ご尤もです。ただ、住民票は移していませんし、移すつもりもありません。金曜の夜から月曜の早朝までは町田にいますし、週の半ばに外勤が1日でも入って上京すれば、つくばでの時間は50%を割ります。こんな状況でどちらに払うべきか、両市で協議して決めて下さいよ。」

この議論は結局町田市側が勝って、納税は従前通りとなったが、つくば帰化人第一号のN君たちは当然面白くなかった。「ゴミは出すが金は払わないとは何事か」という論旨である。「ならば訊くけれど、東京へ外勤しているときにトイレに行きたくなっても、君はつくばまで我慢して帰るのかい？」と逆襲したら、さすがの彼も黙った。

40年が過ぎて、当初の思惑が当たったもの、外れた

ものがいろいろある中で、インフラの整備とともに総じてある種の落ち着きが出て来たようにも感じられる。しかし、私には、次の小話が何となく頭の片隅に引っかかって離れない。いわく――

某大国の研究管理担当者が、つくばを一周して感想を求められ、言った。

「いや、素晴らしい。ただ私には一つ心配がある。万が一将来核戦争が起こってここが標的になったら、お国の研究体制には、一瞬にして取り返しの付かないダメージになるのではありませんか？」

対する日本側の答え。

「いや。ここに勤めている連中のレベルでしたら、いくらでも代わりがいますから、どうぞご心配なく！」

ちなみに、このやりとりには、「これは寓話ではない。実話である。」との注釈までついていたので伝えられている。(了)

SAKAMAKI Yukio (2018) GSJ's historical transfer to Tsukuba 3: An amphibian - comic short stories on Tsukuba.

(受付：2018年8月8日)